

人の動静を上告しなければならなかつた。然も時代の降ると共に幕府の欲する報導の範圍は漸く廣くなり、彼等の上告するところもヨーロッパ、インド及び支那各方面の狀勢に互ること、なつた。而してこの上告文こそ鎖國時代幕府當路者が海外の形勢に就いて有し得た知識の殆んど唯一の根源であり、幕末外交問題の漸く紛糾するに至つて彼等の利用しえた最も根本的な參考資料であつた。従つてその研究は單に日蘭交通史や蘭學發達史の問題たるにとゞまるものでなく、近世日本の政治史・外交史の究明にとつて缺くべからざるものとなるのである。然るに従來その本文の世に知られたものとは僅に通航一覽に引用せられたもの總計五十通のみに過ぎなかつた。板澤武雄氏はこゝに鑑み、日本文化研究所の援助を得て、ハーグ國立文書館に藏せられる出島商館長の日誌の中よりそのオランダ原文を探索すると共に、學者院所藏の寫本荷蘭上告文を基として正保元年(一六四四)より延享二年(一七四五)に至る一世記間に互る百八十五通を輯め、その蘭和兩文を對照せしめ、蘭文のみ存するものには譯文を草し、且つ全編に一々註を加へて之を解説し、更にその總説ともいふべき解題をも添へて本書を公にせられた。われ／＼は何よりもまづこの貴重なる史料の始めて學界の共有に委ねられたことを喜ばねばならない。

筆者は全編を通讀して一年乃至數年つゞ遅れて齎らされる簡單なる報文の中に、東漸し來る西方列強の勢力のあたかも遠く海鳴る潮音の如く次第に高まり來る狀を見て津々たる興味を感

じた。然も當時幕府當路者が果して如何にこの潮音を聞成したか——この風説の意味を果して如何に理解したかを想ひ願るとき唯歴史家のみよく事の意味を知るものなるを思ふのである。(四六倍版本文二八〇頁、解題・索引等三〇頁、東京丸ビル四階日本古文化研究所發行、非賣品)(柴田)

○奈良市史

奈良市役所編

本書は其の序文によれば千年の古都奈良市には其の歴史を語る史籍も尠なしとしないが、尙且つ一讀以て滿喫に足るべき簡要且つ統制ある奈良市史なきを遺憾として前市長森田宇三郎氏が其の編纂を企圖し、市會の協賛を経て京都帝國大學中村直勝助教授に其の編纂監修の事を依頼したものである。然して中村氏は同大學國史科卒業の新進學徒、向井芳彦、清水三男、澤井浩三三氏に依頼し資料の蒐集並に稿本の執筆をせしめたものである。爾來此處に數年を経て、其の間資料の蒐集、史實の檢討に該博なる知識と不撓不屈の努力を拂はれ、博引傍證然かも取捨選擇宜敷を得て簡要平易に悠久千年に餘る市史を僅々五百頁の冊子にまとめ上げたものである。

本書は全卷を三十九章に分つてゐる。其の大體を説明すれば第一章「ナラ」の名義と充用漢字。第二章「食部以前の奈良地方」に就いては取立て、云ふ程の事もない。第三章平城京奠都と其の意義以下第九章佛教藝術の隆盛迄は所謂奈良朝時代に奈良

は政治の中心として又天平の文化を建設せる時代である、從つて此の時代の記述が、僅々七十餘年に拘らず約百餘頁を費して居り然も其の記述は天平の佛教藝術を主として、其の現存せる遺物遺蹟より記述されて居る事は蓋し當然の事であらう。第十草山背負都以下第十三章僧兵の發生迄は古都として、東大寺、興福寺と朝廷並に藤原氏との關係より、兩寺の經濟的發展並に武力たる僧兵の事が説かれて居り、第十四章平氏の南都燒討以下第十九章南都佛教の革新迄は中世の新興勢力たる武家に寺院の勢力たる僧兵の屈服して行く過程であり、佛教史上に於ては平氏の南都燒討、源賴朝の復興があり、當市佛教美術の第二の興隆期でもあつた。第二十章鎌倉時代の商工業以下第二十六章筒井順慶迄は、中世末期の紛亂より終に豪徒の手より豪族の手に其の實力の移る過程を示し、又近世都市への發展形態としての商工業の組織即ち座の發生發達、庶民の活躍等が記述されて居る。第二十章「聖臣氏の時代」を経て、第二十八章徳川氏の支配以下第三十四章幕末維新の奈良迄に於ては、近世武家時代の地方特に直轄都市に對する地方職制並に近世商工都市としての状態が記されて居り、又第三十四章明治初年の奈良及び第三十六章縣治時代の奈良に於ては、明治政府の創草以後明治二十年頃迄の地方行政の改變發達を述べて居る。第三十七章奈良朝時代、第三十八章奈良市制時代、第三十九章最近の奈良市勢は明治二十二年、町制實施以後の自治體としての發達より現在の近代都市奈良の姿を詳細に記述して居る。斯くて此の五百餘

頁の奈良市史に悠久千餘年の奈良の歴史を記述し、一讀以てよく奈良を理解せしめ、以て其の意圖せる簡要統制ある歴史たらしめて居る。尙本書は口繪として奈良地方地圖一葉及び六葉の寫眞版及び四十七個所に互り搜圖を入れて居る事は記事の理解を助けるに役立つ所が多い。(奈良市役所發行、菊判五六〇頁、口繪七、圖版四七)(田中)

#### 國民精神文化文獻一三

#### 立入宗繼文書、川端道喜文書

#### 國民精神文化研究所

戰國末期の皇室の式微を説き、織田信長の禁裡の修復を語るものも、この修復に先立つて或は又この修復に當つて、御倉預立入宗繼及び餅商人川端道喜の絶えざる努力のあつた事を知るものは少ない。今回國民精神文化研究所の手によつて公にされた本書は、この間の事情を明かにしようとするものである。

本書は、上述二人の後裔たる立入宗光氏及び川端道喜氏の許に所藏されてある古文書・記録と、その精密な解説とを収めてある。

收録されてある史料は約百點に達するが、その中には、皇室關係の御事蹟のみならず、又近世初頭の京都市制の解明に資するものが少なくない。更らに西田直二郎・柴田實の兩氏の筆になる解説は廣く當時の日記・古文書に徴した精密なものであるが又それと共に近世初頭の時代の姿を巧みに描き出してある。